

恋の罣(淫乱書生 / Forbidden Quest)

2008(平成20)年2月22日鑑賞<GAGA 試写室>

★★★★



監督・脚本=キム・デウ/出演=ハン・ソッキュ/イ・ボムス/キム・ミンジョン/オ・ダ
ルス/キム・ギヒョン/ウ・ヒョン/アン・ネサン/キム・ルエハ/キム・ビョンウク (エ
スピーオー配給/2006年韓国映画/139分)

特集

熱狂的ブームの去った今こそ真価を問う！

……フランスのマルキ・ド・サド、日本の団鬼六の韓国李王朝版が、ハン・ソッキュ演ずる淫乱小説家ユンソ……？ 現在でも官能小説の挿絵は重要だが、ユンソの小説を支えた春画の画家は……？ 王妃との密通とその過激な体位の性愛シーンを激写した(?)挿絵が、万一バレたら……？ 「性的欲望」をテーマとした人間ドラマは最高に面白いが、くれぐれも同じような実践はされないように……。

ユンソは韓国のマルキ・ド・サド……？

この映画の邦題は『恋の罣』だが、原題は『淫乱書生』。また英題は『Forbidden Quest』、すなわち「禁断の探求」。邦題は、李朝きっての名文家として知られるキム・ユンソ(ハン・ソッキュ)が、王(アン・ネサン)の寵愛を一身に受ける王妃チョンビン(キム・ミンジョン)に仕掛けた一世一代の「恋の罣」というイメージで考え出されたものだが、私には原題の『淫乱書生』の方が生々しくてピッタリのような気がする。この映画の見どころは3つ。第1は、ユンソとチョンビンとの恋と、それに王の想いがどう絡むのか。第2は、文章を書くユンソと挿絵を描くイ・グァンホン(イ・ボムス)との奇妙な、しかし固い友情。そして第3は、特に映画の終盤に明らかになる、ユンソの淫乱小説を書くことへの執念。

ストーリー展開の中、淫乱小説執筆のため、さまざまな男女交合の刺激的な体位を工夫するユンソの姿が若干コメディ風描かれるが、本人にとっては真剣そのもの。さて、そこで提案されるさまざまな体位とは……？ 面白いのは、彼が最後に到達したある構想をみると、それは『クイルズ』(00年)で観たマルキ・ド・サドの世界と

同じだということだ（『シネマルーム1』74頁参照）。この映画は李朝時代としか特定されていないが、ユンソがフランスのマルキ・ド・サドを知っているはずはないから、やはり天才的な淫乱小説家が思いつくことは同じなのかなと、妙に感心……？

李朝時代の官 vs. 民の姿は……？

私が李朝時代の映画が苦手なのは、同じような服装、同じような冠、同じようなひげをつけた姿をスクリーン上で観ると、俳優の名前と顔の識別がつけにくいから……？ この映画は登場人物が少ないのでそういう苦労は少ないが、それでも最初は少し戸惑うことに……。もう1つわかりにくいのが、李朝時代の官僚組織。韓国では2月25日に李明博が新大統領に就任する予定だが、省庁再編について与野党の調整決裂によって、統廃合方針の5省には当面閣僚を置かないため、一部閣僚不在のままの政権発足というイレギュラーな状況下でスタートすることになった。さて、李朝時代のそれは……？ ユンソは司憲府に勤める実直な官吏だが、映画の冒頭、実の弟が辱めを受けてもお耐え忍ぶ姿が映し出される。そのため妻からは、「我が身可愛さに震えている臆病者」と陰口を叩かれていることを知っていますか！」と糾弾される始末。そんなキム家一族の宿敵が「義禁府の死神」と称されるグァンホン。ところが、ユンソはプライベートな感情よりも公務の執行の方が大切と考え、平気でグァンホンと共にある捜査に臨むことに。そんな官の捜査を受けるのは、民の出版業者である淫乱小説の版元ファンガ（オ・ダルス）。といっても、彼の店は表面上は食器屋で、淫乱小説の出版はウラ稼業。また、彼の大切なスタッフは、書写職人（キム・ギヒョン）と模写職人（ウ・ヒョン）。面白いのは、ここで官と民が対立するのではなく、書写職人が書き写していた淫らな小説にユンソが興味を示したこと。とりわけ、書写職人の「戯作者の真髓は、夢の中でしか味わえないものを描くことだ」という言葉は刺激的だったようだ。

そんな、民の影響を強く受けた実直な官吏ユンソのその後の変身ぶりは……？

順調に作家デビュー！ さて挿絵家デビューは……？

寝ても覚めても前述の書写職人の言葉が耳に残るユンソは、ある日、ならば自分で淫乱小説にチャレンジしてみようと決心したのは、李朝きっての名文家としてある意味当然。完成品を恐る恐るファンガに見せると、ファンガはえらく感心してくれたか

らユンソはひと安心。ユンソは秋月色（チュ・ウォルセク）の筆名で綴った『黒谷秘事』によって華々しく作家デビューし大好評を博したが、当代随一の売れっ子作家インボン居士の人気を超えることができなかったのは残念。しかし、そこは文章がうまいだけではなく、頭のいい官吏だから、淫乱小説に挿絵をプラスすればインボン居士を超えられると発想したのはさすが。まさに、現在の新聞の連載小説のスタイルそのものだ。問題は、気のきいた挿絵を描ける絵師がいるかどうかだが、そこでユンソが白羽の矢を立てたのがグァンホン。彼が描いた躍動感溢れる馬の力強さにホレ込んでいたユンソは、グァンホンに対して熱烈なアプローチをしかけてこれを説得。ここに、ユンソ、グァンホン、ファンガトリオによる最強の淫乱小説製作チームが誕生することに……。チョンビンとの禁断の恋を同時進行させているユンソは、チョンビンのことを思いながら、日々淫らな筆を走らせていたが……。

恋のキューピッド（？）になるのは……？

この映画の華は、大きな髪飾りをつけ、豪華な宮廷衣装に身を包んで登場する美しき王妃チョンビン。美しく着飾った姿もいいが、美しい肌をチラリチラリと見せながらユンソの手によって1枚、また1枚（？）と脱がされていくシーンには思わずゾクッ……。もっとも、若く美しい彼女が、なぜ一官吏にすぎないユンソに興味を示したのかについて、この映画は「あるシーン」で説明しようとしているが、それがどこまで説得力をもっているのか私には少し疑問。また、たったそれだけの出会い（？）で、彼女から積極的にある「お礼」を送り届けたり、密会の場所を指定したりとかなり積極的だが、これは、彼女が言うとおりの「王宮を抜けだすのがどれだけ大変か」を考えると、よほどホレ込んだとしか考えられない。

そんな恋のキューピッド役をつとめるのがチョ内侍（キム・ルェハ）だが、映画後半になってわかるのは、チョンビンのすぐ傍に仕えているこのチョ内侍は男の機能を捨てた、中国でいう宦官だということ。もっとも、その立ち居振る舞いは全然そんな風には見えず、むしろその顔つきを見ているとかなり陰険そう……。したがって、単なる恋のキューピッドでは終わりそうにない。そう思っていると、案の定……。

春画のモデルは……？ 白倉敬彦の解説に注目！

プレスシートには、白倉敬彦（浮世絵研究家）の「女性も見ていた李朝と江戸の春

画」という解説がある。ここでは、中国（清時代初期）、韓国（李朝時代）、日本（江戸時代）の春画が1枚ずつ載せられ、中韓日の艶本製作のシステムが詳しく解説されている。その解説が面白いのは、第1に春画の淵源は中国にあるが、韓国と日本の印刷技術の違いによって、江戸時代の日本は現在の出版システムと変わらないのに対し、韓国は手写本であったため普及が限定されていたという指摘。なるほど、だからこの映画のように貸本で艶本が流通していたわけだ。

第2は、春画を描くのにモデルが必要か否かという指摘。韓国の春画は手写本だから、あまり複雑な絵柄はムリ。したがって、モデルなしの粉本（手本）主義で、手本を見て自分なりの創意工夫を加えるというのが絵の描き方だったらしい。ところがこの映画で、ユンソがガンホンやファンガに説明する男女和合の新たな体位は、複雑で卑猥なものだから、ガンホンからは「頭の中だけではなかなか描けない」とのクレームが。そこで「モデルがあれば描けるのだな」とガンホンの確約をとったうえで、ユンソが組んだ恐るべきシチュエーションは、自分とチョンビンがそのモデルになるということ。もちろん、それはチョンビンには絶対内緒だから、ガンホンはそんな生々しい2人の性愛シーンを壁のすき間から覗きながら必死に描写……。

しかし、こんな過激なことをやって、ユンソはホントに大丈夫……？

ハイライト その1——拷問シーン

最初にこの映画の見どころは3つあると書いたが、ユンソ、ガンホン、ファンガらのチームが大成功する前半の多少コメディタッチの展開から、後半は一転してシリアスな展開になってくる。その原因は、匿名作家がユンソであることがバレて、ユンソが逮捕されてしまったため。すると次の焦点は、挿絵作家は誰かということだが、ユンソは頑としてそれを自白しないから、チョンビンも振りあげた拳を下ろすことができず、その点についてのユンソへの追及（拷問）は次第にエスカレートしていくことに。ここらあたりから、この映画にはハイライトシーンが次々と登場する。その第1は、ユンソへの拷問シーン。『王の男』（05年）で観た拷問シーンもすごかったが、この映画で観る拷問シーンもすごい。なぜ、ユンソは頑としてガンホンの名前を口にしないのか？ それは、ユンソのガンホンに対する厚い信頼と固い友情のため。しかし、目の前で拷問されているユンソの姿を見ているガンホンがつらいのは当然。しかして、その拷問シーンの展開は……？

ハイライト その2——内侍との殺陣シーン

拷問シーンの次は、なぜかグアンホンが、散々殴られ足の骨まで折られてしまったユンソを背中に背負って、ファンガの食器屋に逃げ込むシーンが登場する。そして、グアンホンはファンガ、書写職人、模写職人と共にユンソを大八車に乗せて脱出しようとしたが、そこに登場したのがチョ内侍と彼が率いる数人の精鋭部隊。そりゃ、そうだろう。そんなうまく脱出できるはずはないのは当然……。そこで展開されるグアンホンと追手の精鋭部隊との殺陣シーンは迫力満点だから、あなたの目でしっかりと……。ここで焦点となるのは、王妃のスキャンダルがユンソやグアンホンの口から公にされると困るということ。まさか、ユンソやグアンホンがそんなことをするとは思えないが、その点を焦点とした男たちの駆け引きと対決をじっくりと……。

ハイライト その3——王 vs. 王妃、ユンソのセリフ合戦

再び傷ついた姿のまま、王の前に引きずり出されたユンソを見てチョンビンは驚いたが、カンがいい王はとっくの昔に(?)ユンソとチョンビンの密通劇はお見通しだったよう……。そこで王がユンソに下した結論は、「ユンソを宦官にしてチョンビンの傍に仕えさせよ」というもの。「彼の年齢でそんな手術をしたら、命に関わるかもしれません」との上申に対しては、「それならそれがかまわない」という厳しい命令が。この結論に私は多少違和感があるが、さてあなたは……？

そこで、それまで自分の立場をあいまいにしてきた(?)王妃が、ユンソに対する想いをハッキリと口にするところに注目。すると、それに対してユンソも王妃に対する熱い想いをトクトクと……。さて、目の前でそんな2人の恋心を暴露された王が、そこで下した再度の結論は……。この王 vs. 王妃、ユンソの対決は、王、王妃、ユンソの順番で展開される長いセリフ合戦がハイライト。前述のとおり、王の下す結論には多少違和感があるが、3人の俳優の全エネルギーがほぼしりりである名シーンがここに展開される。そんな迫力あるセリフ合戦を十分堪能したいものだ。

『スキャンダル』より上……

この映画は1962年生まれのカム・デウ監督の初監督作品だが、彼は『情事』(98年)や『スキャンダル』(03年)の脚本を書いて脚光を浴びていたとのこと。イ・ジェヨ

ン監督の『スキャンダル』は18世紀の李朝時代舞台として、貞淑な未亡人を「落とす」ことができるかどうかという公序良俗に反する賭けをテーマとし、プレイボーイ貴族の口説きのテクニックをいろいろと見せつけてくれた面白い映画だったが、その底に流れるテーマは人間の欲望（『シネマルーム4』192頁参照）。キム・デウ監督が初監督したこの『恋の罨』も底に流れるテーマは人間の欲望だが、4年の歳月をかけて準備してただけあってこれはすごい力作。したがってその出来具合は、明らかに『恋の罨』の方が『スキャンダル』より上……。

近時、活字離れと出版不況が著しいが、エッチな挿絵が入った淫乱小説なら風味津津々。SM小説の旗手は、フランスならマルキ・ド・サド、日本なら団鬼六だが、韓国では淫乱小説の裏面作家ユンソ。

江戸時代の春画が世界に冠たる売場を遂げたのは、高度な印刷技術のおかげ。しかしこの映画の李朝時代は春画も淫乱小説もすべて手写だから、庶民には高価の花で資本が主

ミイラ取りがミイラとなり、淫乱小説の取り締まりも何のそ執筆の口口口に目撃した司密府の高級官僚ユが偉いのは、挿絵画家アアンホンと頼んだこと。お上

はバカ売れ状態に、えらく上品な邪種は、は自ら考案した首核な体

王妃とユが禁断の恋に墮ちる姿をイメージしたものが手写させたから、その反響は抜群！ユの筆

モテルが必要。そこでユもまずまず淫乱、淫乱手

位に上る王妃との秘事を左王妃をめぐる男の嫉妬心に切り込んだ韓流は見どころ十分。きつと多くの教訓を学べるはずだ。

韓流「淫乱書生」の味わい方

友情、男女の恋愛と純愛、そして立場を超え



弁護士 坂和章平の『LAW DE SHOW』 恋の罨 原題「淫乱書生」

しかし、好事魔多し。密にあって裏面作家の身元が下バラれたから大変。前半のコメディータッチな展開から、後半はいくら拷問されても画家の名を吐かないユとアの友情をはじめ男と女の、そして人間性の本質に迫るシリアスな展開に。性欲は食欲に次ぐ人間本来の欲だから、いくら禁止しても淫乱小説は庶民の必需品？ そんな視点から要録業の男同上の

大阪日日新聞 2008(平成20)年4月5日

2008(平成20)年2月23日記